
幼馴染 恋人になる条件

りんか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染 恋人になる条件

【Zコード】

Z0097Z

【作者名】

りんか

【あらすじ】

「結婚してください」！！ そうプロポーズしてきたのは、小学三年生の幼馴染の男の子。「あと15年経つてカッコイイ男の人になつてたら、考えてもいいかも」と答えた次の日。高校生である相原美結の前にあらわれたのは、20歳くらいの超絶イケメン。その彼が面と向かっていきなり告げてきたのは、「結婚してください」という突拍子もない言葉だった。いろいろな条件をつきつけて彼らの求婚を逃げ続けるものの、なんだかなし崩し的に話が進んでしまっているような気がしてならない彼女と、そんな彼女にふりまわ

されているはずなのに、異世界で最強の力を手に入れたおかげで、なんなく条件をこなしていつてしまう彼とのラブコメディ話（の予定）。

(一) (前書き)

ちょっと愚ひといふのがあり、衝動的に書いてみました。不定期更新になりますが、よろしくお願いします。

(一)

「結婚してすぐださー……」

家を出で、高校へ向かう途中の通学路。突然響いたその言葉に、
私は目を何度も瞬かせながら振り向いた。

そこには、ランドセルを背負った小学三年生になつたばかりの男
の子。その子が、すく真剣な顔でこちらを見上げている姿があつ
た。見慣れたその子に、私はふつゝと息を吐く。

「おはよー、あっくん」

軽くあいさつをすれば、黄色い帽子に包まれた頭をずすりと私
の方に押しやりながら、その子　あっくんはあいさつの返答もそ
こやけに、私へつめ寄つてくる。

4

「ねえねえ、いつ結婚してくれる?」

「いつって、それ昨日も一昨日もその前もきいてきたじゃなーの
」「だつて、ちゃんと答えてくれないんだもん」

ふつと頬をふくらませるあっくんに、私は苦笑いを浮かべた。
そういう話題はあまり興味がない、と言つたりもつと怒るんだろ
うな、この子は。

私は「うーん」と首をひねりながら、まつすぐ立てた人差し指を
唇に当てた。

「そうだなあ……、あと15年経つて、あっくんがめりやくちや力
ツ『コイイ男の人になつてたら、考へてもいいかも』

私の答えに、あつくんの顔がぱあっと輝いた。

「15年だね？ わかつた。絶対だよ？ 約束だからね、みゆ美結おねえちゃん！」

駆けていく背中を見送りながら、私は手を左右に振った。

可愛いなあ、と朝からほのぼのしてしまつ。今日で何度もだらう、あつくんからのプロポーズ。今まで「急いでいるから、また今度ね」と適当にあしらってきたけど、今日は何となく条件を出してしまつた。

彼は、将来イケメンになるんだろうな。幼いけれど、すこしく整つた顔立ちをしているもの。

15年……、かあ。思いついたまま口にしてしまつたけれど、15年も経つたら、私は三十路超えのおばさんだ。どう考えても、眼中にはないだろ？

「ま。もともと私、年下には興味ないしね」

わらじめくへつて、私はこつものコースで高校へと向かった。

「結婚してください」

「……は？」

私の前には、ちゅうと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

その彼に、私は通学途中の道ばたで、いきなり面と向かってそう告げられたのだ。

なんで？ ビックして？

私の頭を、？マークが大量によぎつていいく。

「あの、誰かと間違つていませんか？」

「いや。きみは、相原美結さんでしょ？」

「そうですけど……、どうして私の名前を知つているんですか？」

「幼馴染だからね、きみとおれは」

「はい？」

いやいやいや。

私の幼馴染に、あなたのような超絶イケメンさんは、ビックをひつくり返しても出てきませんから。

「やつぱり人違いですよ。他の“相原美結”さんを当たつてくれ下さい」

そう言つて、私は彼の横を通り過ぎようとする。

と。私の手首がガツとつかまれ、振り向いた私に彼がつめ寄つてきた。その真剣な顔立ちに、私はデジヤブを感じ思わず息をのむ。

「あの言葉は、嘘だつたんだ？」

「あの言葉……つて」

たずねられても、私には心当たりが全くない。

そんな私に、彼は少しだけさびしそうな表情を浮かべた。

「15年経つたら結婚してくれるって言つたじゃないか。美結、お

ねえちゃん

「……！」

その言葉に、私は絶句してしまった。

確かに言った。確かに昨日、この場所でそう言った。

でも、ちょっと待つて。それを言った相手は、昔から知っている幼馴染の小学二年生の男の子で。どう考へても、目の前の超絶イケメンと結びつかない。だけど、そう言ったのはあの子にだけで、しかも他に兄弟のいない私を“おねえちゃん”呼ぼわりするのは、あの子だけしかいないと思う。

いやそんな。まさか、もしかしてもしかする、わけ？

「……あっくん、なの？」

「そうだよ」

そのあっせりとした返事に、私はただただポカーンとなりながら、目を見開くだけだった。

(2)

……ハツ。

秒針がきつちり一回転したんじやなかひつか、それくらこまつち
り間を置いて、私は我に返った。

ありえない。落ちついて普通に考えてみたら、ありえない。そう、
ありえないでしょうが。

この超絶イケメンが、幼馴染で小学三年生のあっくん？ そんな
簡単にイコールで結びつくわけがないってば。
なにこれ、新手のあっくんですよ詐欺？ ああもへ、よくわから
なくなつてきた。じづこつときは。

「じゃあ、そういうこと？」

なかつたこととするのが一番だよね。学校に遅刻するトマズイし、
うん。

通り過ぎようとした私の手が、再び引かれる。しまつた、手首つ
かまれたままだった。

「ちよつと待つてよー。まだ、何か足りないものもあるの？ 約
束どおり、15年経つたからきみを迎えてきたのに」

いやあの、意味がわかりません。

15年経つた？ 昨日の今日で、まだ一日しか経っていないはず
なんですかね。

それより何より。

「本当にあっくん、なの？」

「やつだよ。きみの家の一軒隣に住んでいた、瀬田秋斗^{あきと}」

超絶イケメンが名乗った名前は、確かにあつくんの本名だった。

「なら、証拠はある？」

「証拠？……困ったな。こっちの世界のものは、全部彼に処分されてしまったんだ」

「ん。こっちの世界？ 処分？ なんのこと？」

なんとなく気になるワードが並んだけれど、超絶イケメン い加減この呼び名も疲れたし、超イケに略しちゃおう。
考える仕草を見せていた超イケは、ふいに「ああ、そうだ」と手をたたいた。

「証拠になるかわからないけど、おれが覚えているきみの情報を話してみるよ。相原美結、17歳。ちょっとくせつけの黒髪黒目の純和風人。×高校三年生。両親が海外赴任のため、今は一人暮らし。兄弟姉妹はない。掃除は得意なのに、料理は壊滅的。自分では美味しいと思っているものだから、たちが悪い。この前……、でいいのかな？ 砂糖と重曹を入れ間違えて斬新すぎるクッキー？ みたいなのを作ったこと、あつたよね？」

「ちょっとそこ。クッキー？ とか疑問系にしないで。

あれはクッキーだったの。誰が何と言おうとも、ひよこ型のクッキー。

まあ少しいびつになっちゃって、うねうねとした怪しい生物になってしまったけれど。

「砂糖と塩を間違えるのは聞いたことがあるけど、重曹って。……ああ！ もしかして、砂糖じゃなくてベーキングパウダーの代わりに

入れたの？ それなら、納得かな」

「え、と別にそういうわけじゃ……」

「重曹を使おうなんて、普通思わないのにね。でも、一人暮らしの女子の子の家に食用の重曹がある時点で、めずらしくてす」「ことか

腕組みして感心したようにうなづく超イケに、私は苦笑いを浮かべた。

全然きいてないし。なんなの、この自然にプラス思考というか、天然っぽいマイペースつぱりというか。

けど、このことを愚痴 もとい、話した異性はあっくんだけだ。まさか本当の本当に、この超イケは……。

「ね？ こんなこと知っているのは、おれが正真正銘の秋斗だからでしょ？」

嬉しそうに告げてくる超イケに、私は口ごもる。
もし仮にこの超イケがあっくんとして、どうして急にこんな姿になつたわけ？ 現実では、絶対にありえない。まさか青いロボットの力を借りて、未来からタイムスリップしてきたとか？
そういえばさつき、なんかちょっと引っかかりのある言葉が。

一人無言で考えていた私を、どうやらまだ疑つていると思つたらしい超イケは、「まだ信じられないの？」と嘆息した。

「なら、とつておきの情報を一つ。きみ、家ではノーブラで過(い)しているよね？ 前にきみの家にお邪魔したとき、ちゅうぶん窓から差し込んだ光にシャツが透けて

「わあわあわあ」

なにつ？ なにを突然言つちゃつてくれるの、この人！？ 思わず胸元を両腕でおおう私に、超イケはニコッときわやかな笑みを向けてきた。

「す、」くドキドキしたんだから、おれ。相手が小学生だからって、警戒心なさすぎ。とまあ、これで信じてもらえた？」

(3)

た、確かに超イケが言ったことは正しい。

私は、不自然なほどにゆっくりと胸から手をぬりすと、身体を斜め45度ほど右に動かした。

「まあ、うん。どうしてそうなったのか全然理解できないけど、超イ……もとい、あなたが“あつくん”だつてことは信じてもいいかもしねない」

深呼吸を繰り返しながら答えた私に、超イケの表情がまぶしいほどに輝き始める。それが、初めて結婚の条件を出したときのあつくんと重なった。

うわ……、そういうこんな顔してたなあ、あの時も。本当の本当にあつくん、なんだ。

少しだけ感じ入っていた私に、彼は嬉々としてサラリと告げてきた。

「なら、おれと結婚していく

「それとこれとは話が別」

あつくんの言葉をさえぎり、私はそう言いはなった。途端、見る間にあつくんの表情が暗いものになっていく。恨めしそうな視線をむけてくる彼に、私は思わず目をそむけた。

「そ、そんな顔しても駄目。だって、言つたでしょ？ 15年経つて、めちゃくちゃカツコイイ男の人になつてたら、考えてもいい“かも”って」

15年経つて、めちゃくちゃカッコイイ男の人になつてたら
その部分は、否定できそうにない。

イケメンになるだらうな、とは思つていたけれど、まさかこんな、
某アイドルグループも裸足で逃げ出しそうなほどになるなんて……、
予想外すぎです。

「それにね、女性に結婚を申しこむんだつたら、やっぱり何かしら
の贈り物が必要だと思うの。えつと、そつ。婚約指輪とか」

「婚約、指輪？」

「そうよ。よくテレビドラマでもやつてるでしょ？ 給料の三ヶ月
分です、みたいな。あつくんがどれだけ私のことが好きなのか、態
度で示してもらわないと。ちなみに私、そんじょそこのらのダイヤと
か、普通の宝石には興味ないからね？ どびつきりリアな感じじゃ
ないと、受けつけません」

われながら、むちやくちやな条件だ。

でも、結婚なんてまだ考えられないし、しかも相手は、見た目が
変わつてしまつたとはい、幼馴染のあつくん。正直、恋愛対象と
しては全く意識したことがない。

無理を言つてあきらめさせた方が、彼にとつてもいいに違いない
よね。

それが通じたのかどうか、彼はふう、と短く息をはいた。

「……確かに、プロポーズするのに手ぶらといつのも、おかしな話
だつたね。わかつた、婚約指輪を持つて出直すことにするよ」

その台詞に、私は胸中でひそかにガツツポーズ。
ん。出直す……？

「でも、きみの氣に入る指輪を持つてくれることができたら、今度こ

それと結婚してくれる?」「

私が彼の言葉にひつかかりを覚えているうちに、彼は真剣な表情でつめよつてくる。その様子は、ほんとあっくんと同じもの。変わらない、なあ……。

そう、しみじみと感慨にふけついたら、私は曖昧ながらも首を縦に動かしていた。……あれ?

彼の落胆していた顔が、一瞬にして満面の笑みになる。

「絶対だよ? 約束だからね、美結おねえちゃん!」

駆けていく背中 私の記憶の中にあるものより、はるかに大きくなってしまったそれを見送りながら、私はひしひしと押し寄せてくるデジヤブを感じて止まなかつた。

* * *

次の日。また同じ通学路を歩きながら、私はキヨロキヨロと辺りを見渡していた。

人通りの少ない、静かな通り。いつもと変わらないその場所に、私は吐息をついた。

昨日のあれは、やつぱり夢か幻? そつか。私もついに、夢遊病をわざらうようになったのか。とはいっても、すごくリアルすぎた夢だったような気がするけれど。

(4)

それに。

ここに来る途中、ちょっと気になつて一軒隣の家をのぞいてみたら、不思議なことが起きていた。

一昨日までは確かにあつたはずのあつくんの家が、文字通り消えていた。ポツカリと空き地になつていたわけではなく、両隣だつたはずの二つの家がそこには仲良く並んでいて。

まるで、あつくんの家自体、ここには存在していなかつたようだつた。

「どうなつているんだか……」

首をひねるものの、それで答えが出るわけもない。
その後私は、いつものよつて平穏無事に高校へとたどりつくことができた。

一日の授業が終わり、帰宅部の私は早々に学校を後にした。朝来た道を、今度は逆に進んでいく。

ああ、そうだと空の雲を見ながら思い出す。牛乳切れてたんだっけ、買い物に行かなきや。そつき通り過ぎた交差点を右折して　あ。

そういうえばここは、と気づいて、私は後ろに戻しかけた視線を前に向けた。その先には　、昨日と同じ、ちょっと変わった服装に身を包んだ背の高い超絶イケメン。

しまつた、帰り道はノーガードだった。

「美結おねえちやん…」

私を見つけてしまったらしい、後方からあがる嬉しそうな声。私はそれをなかつたことにして、早々に来た道を引き返し始めた。

「ま、待つてよ… どうして帰つちやうの?」

「どう見てもあなたの方が年上っぽいのに、私を“おねえちゃん”って呼ぶのおかしいでしょ?だから、私を呼んだんじゃないんだと思つて」

「そんなこと言われても、おれ、きみをそう呼んだことしかないしそう。じゃあ、なんて呼んだらいい? 美結ちゃん? 美結さん?」

セヒで一度言葉をくしゃつた超イケは、少しどとまどつたあと、ゆつぐつとその言葉を口にした。

「美結」

「……！」

それが耳をうつた瞬間、私の心臓が大きさなほどに飛びはねる。ストップ! ストップ! 呼び捨てはちょっと……、駄目っぽいです……! 横に並んだ超イケに、私は思わず抗議の眼差しを向けた。すると、彼は少し照れたように頬をかく。

「つて、さすがに呼び捨てはすぐに慣れそうにないから、とりあえず、美結さんでいいかな?」

そう告げてくる超イケに、私は「クククと何度もうなづいた。呼び捨てにされるより、全然いいです。ぜひ、そつしてください。

「じゃあ、美結さん。あらためて、おれと結婚してください」

また、それですか。と、私が嘆息するのと、彼が懐から何かを取り出すのは、ほぼ同時だった。

差し出されたのは、革製の、なんだか上等そうな雰囲気の小箱。見当もつかない私は、当然のように首をかしげた。

「なに、これ？」

「なにして、きみが望んだものだけぞ」

「はい？」

私、なにか望みましたつけ。……あ。

私が思い出すのと一緒に、小箱が開けられる。そこからあらわれたのは、大人が親指の爪と人差し指の爪をくつつけて を作つたらいに大きな宝石。超イケが少し動かすと色が変わり、数えた限りでは七色はあった。

えつと、これはその、もしかして 。

「婚約指輪、これでどうかな？」

やつぱり、そうですか。

私は、自分の口元がいやでも引きつるのがわかつてしまった。

「宝石自体は、あっちの世界のドラゴンの王が持っていたからすぐ倒して手に入れたんだけど、それを指輪に加工するのに手間取っちゃつて……。遅くなつて、ごめんね」

かすかに眉を寄せながら、超イケがそう謝つてくる。

あの、ですね。私の気のせいならいいんですが、この人さり気に今、ものすごいことを言ひませんでした？

(5)

「ドラゴンの王を……、倒した？」

いぶかしげに訊ねる私に、彼は素直に「うん」と返事をした。

「彼に相談したら、一番高価な宝石はドラゴンの王が持っている、
て教えてくれたから。『宝石の価値なんて正直どうでもよかつたん
だけど、早くこっちに戻ってきて美結さんに会いたかったし、それ
にしようと決めたんだ。魔物の中では3本の指くらいに入る強さだ
つたらしく、少していはずつたけど問題なかつた」

問題なかつたって、いや、やつてレベルの問題じゃないような

簡単に倒したみたいに聽こえたけど、ドラゴンって……、漫画と
か小説とか映画とかでボス級の扱いをされてくる、あのドラゴンの
こと？

「ドラゴンって、ファンタジーの世界に出でる翼のあるトカゲみ
たいな顔のやつよね？ めちゃくちゃ大きくて凶暴な……。そんな
のがいるの？」

「ああ、うん。あっちの世界はね、いつもと違つて魔物がいるんだ
よ。ほら、ゲームであるでしょ、ロールプレイングゲーム。あんな
感じにお城もあるし、もちろん王様やお姫様、魔王だつて存在する。
そんな世界なんだけど……。美結さん、わかる？」

「全然」

即答する私。

こきなり異世界の話をされても、ああそりなんだ、と簡単にうな

ずけるわけがない。

私もそれなりにゲームをかじった経験はあるけれど、そんな世界が現実に存在しているなんて、突拍子もなさすぎる。

でも、と私は彼の服装をまじまじと凝視した。異民族風の、動きやすそうな上下の服。これに剣を装備してたら、確かにゲームに出てきそうな格好、なんだよね。

私の視線に気づいたらしく、彼はちょっと照れたように頭をかくと、手にしていた小箱を更に差し出してきた。

「おれからの気持ち、受け取ってくれるよね？」美結ちゃん

「あ、えっと……」

「もりって、くれないの？」

しゅん、と肩を落とし憂いにしづむ超イケ。その悲しそうな顔に、昔、小さなあつくんに意地悪をしてしまったときにわきおじつた感情が、ふつふつと私の心を占め始める。

う、受け取つてしまえば、一歩結婚に近づいてしまう。私は、グツと拳を強くにぎつた。

「あいにくだけど、もらえない。異世界のものと聴いて、なおさらよ。それを私が持つことになつたとして、いつの世界に絶対に影響がないとはいえないもの」

そう、ここで負けてしまうわけにはいかない。

たとえ、超イケの整ったフェイスがどんどん崩れていく様子をとらえてしまつて、田をそむけるタイミングを逃してしまつたとしても。

そう、簡単に受け取るわけには。

「そ、そんな顔されても……、もりつわけには……」

私の振りしぶった声に、超イケの顔がますます暗くなつていぐ。

…………。

だ、だめ……つもうむり……つ！

そう思つた瞬間、私は彼から小箱をひつたくつていた。

突然のことには、何が起きたのか理解できなかつたらしい、呆然となる彼。自分の空になつた手と私を、ゆつくり交互に見つめ、その表情が一瞬で喜びに包まれた。

「受け取つてくれたつてことは、美結さん……！　おれとけつ
「結婚はまだ無理！」

両手をひろげ、今にも抱きついてきそうな彼の前に、私は右の手のひらを突きつけた。同時に、視線を彼からサッとずらす。きっとまた、さつきみたいな顔で私を見ているに違ひないんだもの……！

「もし仮に私とあなたが結婚したとしても、住む新居がないわ。それに、生活する上での収入はどうするの？　私は高校生だし、収入はゼロ。あなたも、見るからに働いている風には思えないもの。先行き不安な結婚生活なのに、結婚なんて出来るわけないでしょ？」

(6)

私のまくしたてを、超イケは田をパチクリさせながら聴いていた。その表情が、見る間にパアツと輝いていく。じ、じの顔は、なんだか嫌な予感が。

思わずあと退りする私の両肩がガシッ、とつかまれ、その衝撃で私の手にしていたかばんが地面に落下する。

「美結さん……、おれ、嬉しいよ」

「はい？」

感動したよつこ声をふるわせながらそつそつと話してくれるものだから、割れ物なんて入ってなかつただろうか、とかばんの中身を順に思い浮かべていた私の思考が一気に霧散した。

嬉しい？ どじをどつ聞いたら、その単語が出てくるのでしううか。

私は、断つたつもりなんですけれど。あ、やつと私の気持ちがわかつて。

「嬉しいけど、同時に自分がすこく恥ずかしいよ」

私の思考をさえぎるように、彼の澄んだ声がひびく。

突然、真剣な眼差しを向けられ、私は不覚にもドキッとしてしまつた。

「今まで美結さんと結婚することしか頭になくて、本当に『めんね。美結さんは、その後のことまでちやんと考えてくれていたのに』

……は？

「いやあの、それは……」

「安心していいよ、美結さん。おれ、今すぐあっちの世界で就職してくるから！」

私の返事もそこそこに流して、彼はクルリと背を向け走り始める。
ファンタジーの世界？ で何になるつもりなんだろう。
とかか就職するのって、あっちの世界でなの？

呼び止めてたずねる暇すらもなく、すぐさま小さくなってしまつた彼を見送っていた私は、一度、一度とまばたきをくりかえしてから思い出したようにつぶやいた。

「……牛乳、買いにいこ」

こつものスーパーで牛乳と、ついでに広告の品で名を連ねていたあんぱんを4つほど買って、出入り口の自動ドアをくぐる。と、視界の隅に入ったのは、スーパーに併設されている100均のダゴゾー。

「あ、そうだ」

ふとひらめいた私は、スーパーの袋を片手にさかうへ足を向けた。

* * *

「そんなところで何をしているの？ 美結さん」

「…」

また次の日の朝。

私はいつもと違う道を選択し、曲がり角の壁に身を寄せながらあの場所をのぞきこんでいた。遠目でだれもいないことを確認すると、ホツと安堵の息と共に高校へ向かおうとして、声をかけられた。私は両肩をはね上げ、マッハの速度でふりかえる。そこには、きょとんとした表情の超イケの姿。

この前とは全然印象の違う、なんだか軍服っぽい服装にマント。胸元で、立派な勲章っぽいものが揺れる。短い髪はきれいに整えられていて、これで白い馬にでも乗っていたものなら、完璧に白馬の王子様だ。

雰囲気変わつて、見た目の破壊力が増している。確實に。ふう、と私は吐息をついた。

「どうして、超イ もとい、あなたがここにいるのかしら？」
「どうしてって、美結さんがここにいるからだけど」

不思議そうな顔で私を見下ろす超イケ。
ああ、そうですか……。

超イケ つてこの呼び名も、そろそろ変えた方がいいかもしない。
口からすべつてしまつて、それをいちいち訂正するのもめんどくさいし。

あつくん、はイメージが幼い小学三年生の彼に固定されているか

ら、不便な気がする。

ちょっと丁寧にして、あつさん？ 紅茶の品種に似たようなものがあつた、うん。

瀬田さん、瀬田くんって苗字で呼ぶのは今更過ぎるか。

じゃあ、まあ普通に 。

うん。普通……、でいいか。

「美結さん？」

「ああ、ごめん。それで、今日は何の用？ 秋斗、くん

「……！」

(7)

ガバッ。そんな効果音が聴こえた、よつな気がした。
次に我に返ったとき、私の身体は彼の両腕の中にスッポリと収められていた。

……。

……？

……！

ぎやあああああ。

昨日に引き続き、私のかばんが地面に落下する。

お弁当、と一瞬思つたけれど、そうだつた。今田のお弁当は、昨日買つた広告の品のあんぱん。個包装だから、モーマンタイ。つぶれていの可能性は、とりあえずスルーで。

それより何より、この状況の方をどう。『美結さん……！』感極まつた声で呼ばれ、私はつかつにも両肩をビクッとほねあげてしまつた。

「今あれのこと、秋斗って……。おれが瀬田秋斗だつて、認めてくれたんだね？ すぐく……、すぐ嬉しいよ」

ギュッともう一回強く抱きしめられ、「ありがと」なんてしゃせられるものだから、私はそのままカチーンと硬直してしまつた。見た目に合つた、さわやかなイケメンボイス。耳元での破壊力は、げに恐ろしきものでござりました。

ようやく解放されたものの、私は田を見開いた状態のまま固まつていた。

そんな私にはお構いなしに、「でも」と彼は続ける。

「名前で呼び合つなんて、なんだか照れちゃうね。……恋人同士、みたいだ」

はにかんだ表情で後ろあたまをかきながら、彼は少しだけ私から視線をそらした。

あの……、ですね。

さつきの行動といい、その関係を飛び越えて結婚なんて言い出しているくせに、なんで一步手前でそんなに恥ずかしがつているんですか。

私が胸中でどうにかツッコミを入れていると、「ああ、そうだ」と秋斗くんがポンと手を叩く。落ちていた私のかばんを拾い、それと一緒に人懐っこい笑顔も向けてくる。

「美結さん、聞いて。おれ、ちゃんと就職してきたんだ！」

あ、どおりで服装が変わっていたわけですね。

納得しながら、かばんを受け取りお礼を言つ。続けて「就職、おめでとう」とも口にしたけど、昨日の夜 朝つてそんな短時間で書類審査や面接が行われたってことだから 、大丈夫なの、その会社。私的には、公務員とか安定したもののがいいなあと思つんだけど。

「そりなんだ。何になつてきたの？」

「うん。おれね、城の兵士に志願したんだ」

そうですよね。こんな格好の公務員いたら、即クビですよねえ。

私の安定生活プロットが、あっけなく崩壊していく。

公務員だつたらそこそここの給料はもらえるし、私も高校卒業してそのうち働きだせばそれなりの生活がおくれ ん？ 私はどうして、そんな生活プロットを？

やばい、やばい……。彼に、もろに影響されてきてる。内心で頭を抱えている私をよそに、秋斗くんは苦笑しながら詳細を語りだした。

「すぐに採用されて魔物討伐に連れて行かれたんだけど、一人で倒してしまつたら、その。一般兵から兵士長に推薦されたんだ。そのあと城に多くの魔物が襲つてきて、それもまたほぼ一人で撃退したら、次に城に呼ばれたとき、叙勲式と同時に一番の名誉と言われる王宮騎士に任命された。ほら、これがその証」

そう言って、秋斗くんは胸元の勲章っぽいものを指し示す。

ついで、一晩で出世街道をどんだけ突っ走つたんですか、あなた。

「お、王宮騎士って偉い人みたいだし、忙しいんじゃないの？」
「うん、そうだね。王様やお姫様の要人警護とか、魔物の討伐隊の組織や対処とか、仕事はいろいろあるみたいだよ」

「こんなところにいても大丈夫なの？ 早く戻らないと、周りに迷惑なんじゃ……」

「ああ、それなら気にしなくてもいいよ。未来の婚約者のところに行つてくる、てちゃんと伝えてきたから」

嬉しそうに、そう告げてくる秋斗くん。

いや、まだOKした覚えはないんですけど、私。

でも、そんなことを口にすれば、どうせまた 同じ轍は、一度と踏まないようになないとね。

無言をつらぬく私に、彼は少し驚いたような表情を浮かべていたけれど、すぐさま最強の輝きと共に顔をほころばせた。

「否定……、しないんだ？ 嬉しいよ、美結さん……！ おれ、美結さんのこと、絶対に幸せにしてみせるから！」

ん？ あれ？

何かがおかしいと思つのは 、 私だけでしょうか。

『おれ、美結さんのこと、絶対に幸せにしてみせるからー。その台詞がどうして現れたのか、私の頭の中で分析が開始された。秋斗くんがお城の兵士になつて、どうやら王宮騎士にまで出世したらしい。

「それでね、この前言つてたもつ一つの条件なんだけど」「ええ」

私は、首を縦に動かす。
そこまでは何も問題はなかつたはず。
どいつもからおかしくなつたのかしら？ その後は、確か。

「美結さん、やっぱり新居は広い方がいいのかな？」
「そうそう」

王宮騎士の仕事の話になつたんだった。
それで、そう。未来の婚約者のところに行つてくもつて告げられ
て！

「そなんだ。じゃあ、お城ぐらうの大きさがこいつでこと。「それよー！」

“未来の婚約者”に、ツッコミをいれ忘れていたんだわ、私。
ああ、もう。そのせいで、あの台詞が出てきちゃつたつてわけね。
油断した。

ようやく合点がこつて、私は意識を秋斗くんへ戻した。

視界にとびこんできたのは、やけに満足そうな彼の笑顔。だいぶ見慣れてきたとはいえ、その表情にはなぜだろう、嫌な予感しかわいてこない。

「わかつた。いい場所を探していくから、楽しみにしておいて」

うなずく秋斗くんに、私は目をまばたかせた。

いい場所？　と、私の中で？マークが大量発生する。

「何の話？」

「またね、美結さん。次こそは、いい返事をきかせて欲しいな」「は？　だから、何の話を……って人の話をきけえええ～っ！」

勝手に走り始めた背中に私は思わず声をはりあげたけれど、全く耳をもたないらしい彼の姿は、そのまま小さくなり、そして消え去った。

つて何度もですか、この展開……。いつまで続くんだろう　と考えて、私ははた、と気がつく。

「これつてもしかして、私が結婚をOKするまで終わりがないってこと……？」

まさかね。

まさか……、よね。

そもそも彼も、飽きるか失敗かくらい、するわよ、ね？

15年後にやってきて、すじく高価らしい「ドラゴンの宝石」で作った指輪をもつてきて、さらに一番の名譽と言われる王宮騎士にもなつて。つて、どれだけハイスペックなんですか、あの人。

今までの彼の成績を並べてみると、彼に不可能はないんじゃない

だろうか。そんな不吉な考えに直面する。

今回はどうして帰つてしまつたのかわからないけれど、とりあえず次の条件がまだ必要なら、そう簡単にクリアできなにようなものにしないと。

あちらの世界は、ロールプレイングゲームみたいな世界だつて言つていた。ロールプレイングゲームの最終的な目的は 、そりよ。あれしかないとわ。

ひらめいた私は、唇をかみしめ静かにうなずいた。
来るなら来なさい、秋斗くん。今度こそ、絶対にあきらめてもら
うんだから……！

＊＊＊

「……っ」

今日も私は、キヨロキヨロと辺りを何度も見渡すといつ怪しい素振りを見せながら、いつもと同じ通学路を歩いていた。

おかしい。こんなに何もないなんて、おかしそぎる。

私は、かばんを持つ手に力をこめた。

あれから、いつの間にか一週間が過ぎていた。

彼が 、秋斗くんが「またね、美結さん」って言いながら走り去つていつたのが、ついこの前のような気がする。これも何かの布石なわけ？ と警戒しながら次の日以降を行動したものの、結局何も起こらずに私は嘆息を落とす。それの繰り返しだった。
あ、と一つ思い当たり、私は足を止めた。

「やつと、あきらめてくれたってこと？」

いろいろ条件をつけたし、何かしらクリアできなかつたのかもしない。私に愛想をつかしたつてことも考えられるか。

それともあれは、やっぱり夢か幻だつたのかしら？

チラリ、と消失したままの彼の家を見やりながら、私はいつも通り高校へと向かつた。

「うん、今日もいい出来じゃない

ふう、とトングを持った手の甲で前髪をはらいながら、私は自信満々に笑みを浮かべた。

皿の前には、ガスコンロとフライパン。フライパンの中には、緑と黒に彩られたパスタの姿。緑は冷蔵庫にあったレタス、黒は今日の特売で買ってきたあん。ちょっとした隠し味に、と最後にコーンヒーを入れてみる。

白い皿にもり、きざみ海苔をパラパラかけて。ちょっと和風っぽさをつけ加えれば よし、夕飯完成、と。

キッチンからその自信作を持つて、私はリビングへ移動した。テーブルに置きながら、ソファーにほうりつ放しだったダゴゾーの袋を見つける。皿の代わりにそれを手にすると、私はソファーに腰をおろした。

「対処法になると思つて買ったのに、無駄になっちゃったか

袋の中身をのぞきこみ、短く嘆息する。

それにもしても、本当にどうしちゃつたんだろう。急に顔を見せなくなると、気になつてしまふがな。

私に愛想をつかせたくらいだったら、全然問題はないんだけど。むしろ、その方がいいし。でも。

ふ、と私の脳裏を、秋斗くんのさわやかな笑顔がよぎつていぐ。つて、このタイミングで、くつきりはっきり出てこられるど、なん

とこりうか非常にマズイ感じが……！

「、これがもし彼の作戦だつたら、そつ思ひと少しだけ背筋がゾツとした。

でもあの性格だし、そんなに深くは考えていなさそうな？ 王宮騎士になつたつて言つてたし、忙しいんだろう、きっと。

そう結論づけて、私はテーブルのあんこ入りパスタに手を伸ばした。と、その時。

ピンポン。来客を告げるチャイムが、部屋中に響きわたつた。こんな時間に、誰だろう？ 宅配便なんて、予定にあつたつける？ ソファーから立ち上がり、玄関へ向かう。

「どちら様ですか？」

たずねてみたけれど、返事はない。

怪しく思いながら、チーンロックをした状態で扉をそつと開く。ガシッ。それを待つていたかのように、あいた隙間から四本の指先が入りこんできた。

な、なにこれ……！ デジぞのゾンビ映画に出てきそうなシチュエーションに、私はあわてて扉を閉めようとしたけれど、想像以上のパワーに引かれ、私は早々にギブアップ。最後まで抵抗していたチーンロックが、あっけなく千切れとんだ。

防犯の意味、なさすぎる。

あきらめて成り行きを見守りながら、私はそんなことを思つていた。

その後、何事もなかつたように家に入ってきたのは、さつきまで私の思考を独占していた人物。

「ああ……。やつと、開いた」

「秋斗、くん……ー？」

ホ、と息を吐いてから、彼は私にいつもと同じ雰囲気の笑顔を向けてくる。

「こんばんは、美結さん。会いにきたよ」

「！」

私は、彼の破壊力満載の笑みを目にした途端、はじかれたようにリビングに戻った。

ダゴゾーの袋をあさり、手にしたそれを目の辺りに装着する。ふう、と大きく深呼吸をしてから、私は手探りで玄関に引き返した。

「どうしたの？ それ」

秋斗くんが、不思議そうにたずねてくる。その声に、彼のいる場所のだいたいの予想がついた。

ふふふ。これなら、彼の笑顔やら何やらにまじわることは絶対ないものね。真っ暗な視界で、私は彼がいると思われる方向にしてやつたりとうなづく。

「もしかして見えてるの？ おれの動き」

ヒラヒラ、と田の前で手を動かしているのか、かすかに鼻の辺りに風を感じる。

……まあ、うん。

彼が何をしているのかよくわからなくなってしまつのが、これの最大の難点といえば難点だ、けどね。って、え。

「……！？」

次に訪れた不意打ちのようなやわらかさと苦味に、私の全てが力
チーンと硬直してしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0097z/>

幼馴染 恋人になる条件

2011年12月16日17時48分発行